今週の本棚

池澤　夏樹　評

〈日本人〉の境界

小熊英二著（新曜社・5800円）

日本国民とはだれだったかを検証する

子供が青年になるにつれて、世界像が変わる。最初に学校教育で与えられた像は、彼が社会に出て見聞を広め、知識を増すうちに、より現実的で精緻なものになる。

国というものについて、とりわけ我が日本について、子供たちはずいぶん硬い像をまず与えられる。国こそはすべての基本、生活の基盤、もっとも信頼できるもの。不幸なことに、社会生活が長引くと共にこの信頼は揺らぐ。国の形と運営には別のやりかたもあることを国民はいつも意識していた方がいい。

国民とは何か。その国に生まれた者、というほどことは簡単ではない。近代国家においては、国民たる要件は誰かがどこかで、国を営む上で有利なように決めているのだ。あなたが日本人であることはあなたが思っているほど自明ではない。

ところが、明治維新以降のこの国の歴史において日本国民とは何だったか、それを明らかにする書物は（ぼくが知るかぎり）今までなかった。自分が日本国民であり日本人であることを一度も疑ったことがない人たちの手によって、日本史は書かれてきたらしい。

小熊英二の『〈日本人〉の境界』は近代史の空白部分を検証して、この国の運営方針を明らかにし、その得失を論じる野心的な本である。英語のディスカヴァー（発見）という言葉の語源は「覆いをはずす」ということだが、この本はまさに近代史を隠してきた覆いを引き剥がしてくれる。

日本国民であるか否かの境界線上にたくさんの人々がいた。沖縄、台湾、朝鮮半島の住民、それにアイヌ。この人たちの扱いにこそ、日清戦争から第二次世界大戦を経て戦後も五十年を超える長い期間、日本を動かしてきた原理がくっきり見える。本書は周辺地域に視点を据えた上で近代日本史を構築しなおす試みであり、それに成功している。

厖大かつ具体的な実証の過程がおもしろいのだが、それを短い書評で再現するのは難しい。得られた結論の部分をぼくなりにまとめてみよう――国家はおのれの必要に応じて「国民」の範囲を決める。すなわちある人人を取り込み（包摂という）、ある人々を排除する。その際の基準は国の利。「大日本帝国にとっての国民統合とは、まずなによりも、このような国防上および財政上の人的資源を確保することであった。朝鮮人や台湾人と内地人の通婚を規定する法制の審議において、政府や軍が抱いた最大の懸念が『日本人』の純血を守ることでも、朝鮮人や台湾人が入籍その他によって『日本人』の権利を獲得してしまうことでもなく、貴重な兵員資源である内地人男性が朝鮮籍などを取得して『日本人』から離脱してしまうことであった」と教えられて、ぼくは感心する。国民とは国家の資源だったのか（そういえば、夏目漱石は北海道に籍を移して兵役を逃れている。当時北海道はそういう別格の地だったのだ）。

国が国民を資源と見るのに対して、人々の側は時に権利を求めて国に入りたがり、時に義務を嫌ってそこから逃れようとする。しかしこの駆け引きは、日本に復帰すべきか否かでさんざ悩んだ沖縄を例外として、戦後の日本人の目にはなかなか見えない。戦中から戦後にかけて、日本は沖縄をいいように利用したから、沖縄人は日本を覚めた目で見ることができたのだ。

植民地ないし二級の国土の経営のしかたには二種類あって、ひとつはその地の旧慣を温存し、少数の官僚を派遣するだけであとは自治に任せる方法。もう一つは本国の制度や文化を持ちこむ同化策。前者の方がコストも安く経営も楽であるにもかかわらず（西洋人の顧問がそう進言していた）、日本の政府は後者を選んだ。

その裏には、西欧人は最強者として世界に君臨できたが、後発の小国日本は常にその西欧の視線を意識しながら近きアジアに進出しなければならなかったという事情があった。当時の日本は脱亜入欧というスローガンを必要としたのだ。植民地経営というと搾取とか収奪とか経済的理由が頭に浮かぶが、国防や人的資源の確保、時には逆に人減らし、などの理由もあった。

同化策は優秀な人材を多数派遣しなければならないし、文化を強制するわけだから現地の人人の反発を買う。しかし日本には植民地を放任する自信がなかった。「不安と自信不足を解消するために、相手に犠牲を払わせることによって愛情と献身的忠誠を証明させずにはいられないという心理は、まさにサディズムと称してよい」。それが今もって尾を引いている。アジア諸国との過去の関係について日本が言うことは今も謝罪と強弁の間で揺れている。

ついつい結論だけを拾うことになったが、本当におもしろいのは具体的な歴史の解析の部分だ。中でも大きく扱われている沖縄について言えば、沖縄と日本の関係をこれほど明快に解き明かした本はこれまでなかった。今後、近代日本史を考える者には必読の一冊である。